

ああ、相談業務

～ 仁志君の話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

20

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

今回は、とても長く支援を続けている青年の話をしてしようと思う。筆者は小中高校のスクールカウンセラーとして22年近く働いてきた。現在では担当校は少なくなったが、多い時は小学校、中学校合わせて6-7校などということもあった。当時小学校低学年だった子ども、今では、30代になろうとしている。長年地域で相談を受けていると、小学校時代に学校で関わっていた子が、大人になって「かかし」に相談に来ることもあるが、今回のケースは、小学校から今に至るまで、ところどころ飛び飛びではあったがずっとかかわってきたケースである。

家族

仁志君の家族は、母親、妹の三人である。仁志君と逢った当初は、本人が小学校3年生、妹は2歳であった。父親は妹が生まれるころ離婚し、その後すぐ亡くなっていた。母方祖父は亡くなったのかおらず、祖母がかなり離れた海辺の町に住んでいた。父方祖父母とは縁がなかったのか情報が無かった。

相談経過

仁志君と逢ったのは、彼が小学校3年生に上がってすぐの4月のことだった。担任の先生から、3年生になってもトイレに一人で行けない子がいるので見てほしいと言われ、関わったのが最初である。教室に見に行くと、仁志君は目がクリクリと大きく、色白で、細身のかわいらしい子だった。ちょうど図工の時間で、工作をしていたが、その様子を見ていると、ハサミの使い方などぎこちなく、手の不器用さが目立っていた。先生の指示を聞いていないこともあり、周りから注意されたり、出遅れたり、先生からもう一度指示を貰ったりしながら授業に望んでいた。

勉強はできるほうではないとは聞いていたが、おそらく知的に良くてボーダーかなと思いつながら様子を見ていた。そしてその時間が終わった昼休みに仁志君は先生に連れられて相談室にきた。

仁志君は人懐こく、初めて会う筆者にも、物おじすることなく話しかけてきた。絵を描きたいというので画用紙とクーピーを渡した。彼は早速才

レンジのクーピー一色で、除雪車を描いた。その絵はそれなりに上手に描けていて、得意げに、「除雪車が大好きなんだ。冬になると除雪車があるから楽しみ。僕は除雪車の運転手になる」と目をキラキラさせながら説明してくれた。除雪車にも様々な種類があるので、彼はいくつか描いて、それぞれについて説明してくれた。本当にこうした特殊車両が好きなのだなというのがよく分かった。

絵を描き終わって、そろそろ昼休みが終わるころに、彼が突然「トイレについてきて」と言った。一人でトイレに行けないというのは聞いていたので、まずは様子を見ようと付いて行った。男子トイレなので、「私は入らないけど入り口にいるから」というが中々入らない。他の子がいるからかも思っただけでしばらく待ち、他の子がいなくなったところで、「トイレは一人で出来るんだよね?」と確認すると「うん。でも一人だと怖いから入れない。」という。(私)「何が怖いのかな?」(仁)「目のお化けがいるから」(私)「目のお化け?どんなの?」(仁)「目がね、た〜くさん繋がってるんだよ。すごく怖いよ。」(私)「そうかそれは怖そうだね。いつも先生はどこまでついてくるの?」(仁)「いつも中まで来てくれて、そばに立っててくれる」(私)「じゃあ、トイレの中まで入るけど、すぐ後ろにいるから、それならトイレできるかな?」(仁)「わかった。大丈夫」ということで無事トイレを終えて教室まで送っていった。

その日以来、スクールカウンセリングでその学校に行くたびに、彼が相談室に来るようになった。幸いその学校では他に困っている子が少なかったため、面談の合間に彼と話すことが増えた。その中で、目のお化けについて聞くと、絵にかいてくれて、目が一杯連なって出来たお化けのようなものを描いて、「これがトイレにいるんだよ。先生方のトイレにはいないけど、子どもは先生方のトイレには入れないし」という。そこで、心理療法を行い、本児の不安感を軽減し、トイレに行って一人で入れるようになるまで何回か訓練した。最初はトイレの中まで付き添ったが、その後、ト

イレの入り口で待つことでよくなり、更に、廊下で待っていても大丈夫になり、最後は一人でトイレに行けるようになった。トイレの問題は解決しても、本児は時々相談室に顔を出し、話をしていくようになった。

一年近くたった翌年の2月、母親面談を行った。母親はぽっちゃり系で愛想はよく、まあまあ話してくれる人で、工場で働いていた。本児の発達課題について話をし、いずれ発達検査をした方がよいのではと伝えた。当時余り理解したようではなかったが、その後の発達検査には同意し、学校に設定するように伝えた。筆者はその後、年度替わりに別の小学校に移ったため、その後の様子は次の担当者からたまに聞く程度だったが、結局発達検査は受けず、特に問題なく小学校を終えたようだった。途中、お店で彼と母親に会ったことがあった。彼は元気そうだったし、母親もニコニコと挨拶してくれた。かわいい子だったので「ジャニーズにいるような子だね」と言ったら、うれしそうに笑っていた。

次に仁志君に出会ったのは中学校である。地域の中学校で三つの小学校から生徒が集まっていた。その一つが仁志君のいた小学校で、久しぶりに会った彼は身長は伸びたが相変わらずヒョロヒョロとしていた。

中学校では、相談日に結構相談が入っていたため、それほど彼と話す機会はなかったが、それでも時々顔を出しては、あれこれ友達の文句を言って帰っていくという感じで関りが続いた。友達と喧嘩をするなどの問題行動はなく、学校でも特に問題視されることは無かった。彼自身は、友達から時々いじられるため、イライラしていた。当時相談室にパンチ出来るものを置いていて、彼は相談室でそれをパンチしたり蹴ったりして発散し、また教室に戻るという感じであった。怒りを上手く出すことができていたから学校生活を送っていたと思う。学力は下の方にいた。体育はまるきりだめで、小学校の時も鉄棒も、跳び箱も、縄跳びも、サッカーなどのボール運動も全部だめだったので、こればかりは仕方ないと彼自身もあきら

めていた。中学では運動ができないことだからかわれることが度々あったようだった。そうして何とか中学生生活を終え、高校に進学した。

高校でも本児と逢うことになった。管内の公立高校（人数割れで全員入学）に入学した彼は、此处で問題行動を起こすようになった。今までは人知れず発散していたイライラが、ロッカーを蹴ったり壁を殴ったりするようになり、先生方から注意を受けるようになった。その学校のスクールカウンセラーになったのが、彼が高校2年生の時、着任するなり、数人の問題生徒について知らされ、その中に彼の名前があった。小学校から知っている子であると伝え、面談をしていくこととなった。

その学校にはやんちゃな子も沢山いて、そういう子にとって彼は恰好の標的にされ、いじられた。歯向かうことができない彼は、結局一人イライラして物に当たるということが繰り返されていたのである。いじる子たちへの指導を先生にお願いし、なるべく彼にもその子たちと関わらないようにと伝えて、しんどくなったら先生方と話すようにとイライラ解消の方法を一緒に考えていった。

彼は中学校の担任とも仲が良く、時々中学校に行き話をしたり、高校の先生と話をしたりして、何とか落ち着きを取り戻し、学校生活を送っていた。3年生になって、進路を決める時に彼の特性について担任から進学先に伝えることをお願いし、彼は専門学校に進学した。専門学校は自動車整備の学校で、またまたそこにもやんちゃな子がいっぱいいて、結局そこでも彼はいじられることになった。何しろ運動系がだめなのと、力が無いので、タイヤを持ち上げることもできないのである。訓練の車をぶついたり、運転がぎこちないことなどを他の生徒から揶揄され、その度にイライラについて、物に当たるということが繰り返された。専門学校の担任が何とか話を聞いてくれて、退学などの措置になることは無かったし、整備士の資格試験にも合格したし、運転免許も何回かのトライで受かっていたので、卒業・就職となった。

某自動車会社の整備工場に就職した彼は、そこで先輩整備士から馬鹿にされ、怒鳴られ、ろくに

指導もしてもらえず、ただただ洗車を続けるなどの扱いを受けた。挙句に会社から受診をするように進められた。その時「かかし」に来室し、どこかの精神科が良いかと相談を受け、幾つか精神科を紹介した。

その中の一つの精神科を受診した結果ADHDと軽度知的障害の診断を貰った。それをもって会社に行ったところ、会社は自主退社を勧め、彼はよくわからないまま退職してしまった。

会社から受診しろと言われ、その受診結果を元に退職を求めるのは違法である、違法だから労基署に訴えるかと確認したが、それもしないということでそのままになった。発達障害者支援法が施行された後でもあり、これは明らかに不当な退職誘導なので違法行為になるのだが、本人が望まない以上どうしようもない。

彼はその後、相談に度々来室しながら仕事を探し、障害があることを前面に出してハローワークでも相談していた。一度同じ整備の仕事に就くも、そこでも駄目で一か月ほどで辞め、アルバイトも考えていたところに、幸い正職員として産廃業者に就職が決まった。

ところが、そこでもパートのおばちゃんや、いかついトラック運転手のおじさんたちに馬鹿にされ、怒鳴られ、その度に「かかし」に来て「もうやめたい」というのだが、捨てる神あれば拾う神ありで、彼の味方になってくれる上司のおかげと、中高時代の先生方など、信頼する先生方のところに出かけて行っては愚痴をこぼすことなどで何とか踏みとどまり、仕事を続けてきた。

先生方は転勤であちこちに移動し、どうしても関係が切れてしまうが、「かかし」は地元にあることから、時々話に来ることが続いている。給料は多くないので、正規の料金では続かないため半額以下で受けていた。

相談では職場で怒鳴られた話が殆どで、おばちゃんやおじちゃんに対する怒りを吐き出していた。その後部署移動し、彼の好きな重機を扱えるところの担当になった。怒鳴ってくるおばちゃんはおらず、おじいさんが一人いるところで、彼に

とって環境はずっと良くなった。最初はとても喜んでいただけ、処理する機械や重機が古くて壊れたり動かないことで処理するものが溜まってしまっ、困るなどトラブルが多く、機械を直すとしてうまくいかないと切れて、物に当たることもあった。それでも、受診行動は続いており、イライラへの頓服も続けている。憧れの除雪機と同じような重機に乗れていること、怒鳴られながらも7年働き続けたことから、ある程度上の立場になってきたこと、仕事にも慣れてきたことなどから仕事の方は漸く安定してきた。

すると次の問題が出てきた。今の問題は母親との関係である。

妹は専門学校卒業後アパートを借りて自立。母親は体調の問題で無職。結局彼が働いているお金で家が回っている状況である。しかし彼は自分のお金を管理させてもらえず、すべて母親が管理し、お小遣いとして数万円を貰っている。妹は自立したのに、彼については母親が頑として自立を認めない。通帳も全部母親が隠し持ってしまって、どこにあるのかもわからないという。

通帳を失くしたと言って届け出る手もないわけではないが、それをするなら家を出る覚悟が出来ていないと無理だし、引っ越し費用も溜まっていないとできない話である。

通帳を返してもらいたいと話してみたそうだが、拒否されたという。我慢して頑張っている、時には旅行にも行きたいし、買いたいもの(大抵はミニカー)もあるし、友達と飲みにも行きたいが、いちいち誰とどこに行くのか等まるで小学生を扱うように扱われていて、働く意欲にも影響が出るという。そして数少ない休みの日は、アッシーとして、母親の買い物とパチンコの送迎に使われるのだという。「家を出たい」これが彼の最近の訴えである。

まずは現状の整理。大好きな重機を扱えていることを第一にあげ、更に辛い仕事を頑張っていることを認めつつ、一つ一つ課題をクリアーにしていくことを一緒に考える。仕事が順調であれば、一人になってもやっていけるであろう。妹は自立

したとはいえ、バイト生活である。正職員として働いている彼が自立させてもらえないのは差別ともいえるだろう。

最近母親の方が彼に依存していることに彼自身気づいた。軽度発達障害とADHDというハンディはあるものの、何とか仕事も頑張っているの、これからも話を聴きながら、彼の自立に向け支援していこうと思っている。

まとめ

本ケースは20年以上という長い年月、飛び飛びながらかかわってきたケースである。小さい時から関わってきて、様々な問題を抱えていることは最初に会ったときに気づいていたが、どうしてもずっと同じ学校に在ることができず、途切れることなく関わるのが難しかった。引き継いではいたが、それでも診断が出ていないと学校でも十分に支援してもらえないことが多い。本ケースでは高校と専門学校の先生がとても細かくフォローしてくださったが、就職後までは面倒を見られないのが現実である。そうして社会に出た場合、障害者枠の就労でさえ、問題が起こるのに、障害の診断を受けていない者は、健常者として扱われ、今で言うハラスメントを嫌というほど受けることになるのである。

発達障害を持つ大人への支援は不十分である。発達障害者支援法が施行されて20年以上経つが、その間に不利益を被った人がどの位いるのだろうか? 「かかし」には、障害を持ちながら職場で不当な扱いを受けて相談に来る方も結構な数いらっしゃる。労基署に同行したり、会社に対して意見書を書いたり、出来ることはしているが、それでも限界がある。学校現場では漸く発達障害の理解が少しずつだが深まって来た。社会に浸透するにはまだ10年、20年かかるのかもしれない。一日も早く、よりよい社会、様々な障害を持つ人も、健常者とされている人も、心地よく過ごせる社会になることを祈りたい。